

立場が人を創る

佐倉市立志津小学校
校長 辻 太久郎

スタンフォード監獄実験というものをご存じでしょうか。これは、囚人役と看守役を学生に演じさせ、実際監獄と同じ状況下で生活させるとどうなるか、という心理学的実験です。その結果は、囚人役は凶悪もしくは卑屈な本物の囚人らしくなり、看守役は無慈悲で高圧的な本物の看守らしくなったそうです。企画側は、特に細かい指示は出していません。「暴力禁止」という最低限の指示は出していました。ところが最終的には、看守役からの囚人役への暴力が常態化するに至ってしまったのです。どちらも普通の学生だったにも関わらずです。その「立場」が言動や人格に影響を与えたのです。

「立場が人を創る」と言います。「スタンフォード監獄実験」は、それがマイナスに表出した例ですが、今の六年生の場合は、それがプラスに現れています。朝、登校班の先頭に立ち、低学年の子どもたちに歩調を合わせ、時々振り返り安全を確認しながら登校してきます。慈愛に満ちたカルガモ親子のようです。また、彼らは朝、一年生の片付けや授業準備などのお手伝いをしに教室まで来てくれています。その姿も「頼りになるお兄さん・お姉さん」そのものです。休み時間にも、一年生と遊んであげたり、元気のない子を励ましたり慰めたりする姿を目にします。「六年生」「最高学年」という立場が、彼らの行動をそれにふさわしいものに導いているのだと思います。

一方、一年生もがんばっています。初日より二日目、二日目より三日目と、日を重ねるごとに集団に秩序が形成され、一年生らしく成長しています。彼らについてもまた「小学生」という立場が、その成長に拍車をかけているのでしょう。

しかし、六年生になれば、あるいは一年生になれば、放っておいても自然に六年生らしく（一年生らしく）なるというわけではありません。そこには、自覚を促し期待し、叱咤激励する保護者や教職員、周囲の大人の力が呼び水として不可欠です。

思えば、私たちは様々な「立場」にあります。親、社会人、地域住民等。そしてその「立場」らしい振る舞いを意図的または無意識にしています。そのことが自身のアイデンティティ形成に影響を与えてさえいます。名優、高倉健さんも、本来おしゃべり好きでいつも周囲を笑わせるような人だったそうですが、「無口」「不器用」という役作りに没頭する余り、それが高倉健さんそのものになった、と言います（ごく親しい人とは、変わりなく饒舌で面白い人であったようです）。私も昔の仲間と会って会話をしていると「今の発言、教師っぽい」と言われることがあります。知らず知らずのうちに、教師っぽくなっていったのです。もし、街でジャージに革靴を履いている人、逆にスーツにスニーカーを履いている人、または百円ショップで同じ文具系のものを30個前後まとめ買いをしている人を見かけたら、それは教師です。

さて、六年生が最上級生としての自覚に目覚め、それにふさわしい行動を身に着けつつあるわけですが、その要因はもうひとつあると思います。それは、歴代の六年生が、六年生のあるべき姿を示してくれてきたということです。一年生の頃からその姿を目に焼き付けてきた彼らが今、六年生らしくなるのは、自然なことなのかもしれません。また、彼らはいずれ大人になります。今は大人の姿を目に焼き付けているところです。我々大人の姿そのものが、彼らの将来の姿そのものになることは、容易に想像できます。情報が氾濫する今、彼らは様々な大人の姿を目にするわけですが、彼らの最も身近にいる我々は、そのことを肝に銘じ、身を引き締めなければならぬと、身が引き締まる思いです。